九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『六の宮の姫君』の自立性

海老井，英次

https://doi.org/10.15017/12240

出版情報：語文研究. 24, pp.42-49, 1967-10-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『六の宮の姫君』の自立性

海老井　英次

芥川龍之介の作品『六の宮の姫君』（『表現』大正十一年八月初掲）を、芥川の歴史小説の秀作とする見解[1]がある。しかし、そうした評価が、この作品の原典である『今昔物語本朝巻九第五話・六の宮の姫君の夫出家するものがたり』[2]（以下原話と略）が有している優れた文芸性と、当作品のそれとの関係を不分明のまゝになされたとの懸念を残していた。そして、原話と当作品を比較考察した先学は、芥川独自のものとしては、それ程高い評価をこの作品に与えていないのである。

例えば吉田精一氏は次のようにいわれる。

六の宮の姫君の話は、今昔物語中最も悲劇的で、印象深いものである。呪われた運命の支配下に置かれた弱い女性のあわれな生活を、世相の背景のもとに如実に伝えている。この題材を捉えたのは流石に彼の眼光の鋭さを語るものであろう。ただ原話がすぐれているだけに、彼の手柄はそれだけ少い。「極樂も地獄も知らぬ、腑甲斐ない女」のはかない一生を、憐れとは思いつゝも、敢えてさげすもうとしたのが、彼の心境だった。[3]

さらに、芥川のいわゆる「今昔物」についての詳細な研究を最近利行された長野甞一氏は、その著『古典と近代作家―芥川龍之介』（昭・42）の中の「六の宮の姫君」の章において、原話との綿密な比較研究の後に、次のように結論されている。

芥川のこの作品を賞するなら、少なくとも半ばの功を原典に帰し、今昔物語をも合わせて賞するのが至当であると思われる。芥川独特の手柄といえば、この原典に眼を着けた鑑賞眼と、それを手際よくまとめたこと、女主人公の思想や性格をいちだんと闡明にしたこと、及び洗錬された文章を列挙すべきであると思う。

以上代表的な二つの見解は、『今昔物語集』中の原話がもつ高い文芸性を前提として、それに着眼した芥川の「鑑賞眼」、及び原話の文芸性をより「洗錬」した形にまとめた芥川の技術的才能を認める見解である。

ところで、これもすでにあまりに有名であるが、芥川が歴史小説について述べた次のような文章がある。

A、歴史小説と云ふ以上、一時代の風俗なり人情なりに、多少は忠實でないものはない。しかし一時代の特色のみを――殊に道徳上の特色のみを主題としたものもあるべきである。――中略――しかし日本の

歴史小説には、未だこの種の作品を見ない。日本のは大抵古人の心に、今人の心と共通する、云はばヒュマンな閃きを捉へた、手っ取り早い作品ばかりである。（澄江堂雑記　九　歴史小説）

B、今僕が或テエマを捉へてそれを小説に書くとする。さうしてそのテエマを藝術的に最も力強く表現する爲には、或異常な事件が必要になるとする。その場合、その異常な事件なるものは、異常なだけそれだけ、今日この日本に起った事としては書きこなし悪い、もし強て書けば、多くの場合不自然の感を讀者に起させて、その結果折角のテエマまでも犬死をさせる事になってしまふ。所でこの困難を除く手段には、「今日この日本に起った事としては書きこなし悪い」と云ふ語が示してゐるやうに、昔か（未来は稀であろう）日本以外の土地か或は昔日本以外の土地から起った事とするより外はない。僕の昔から材料を採った小説は大抵この必要に迫られて、不自然の障碍を避ける爲に舞臺を昔に求めたのである。（澄江堂雑記　三十一　「昔」）

さらに芥川が歴史小説を書くに際して、多くの材料を仰ぎ、『六の宮の姫君』もまたそうであった『今昔物語集』について

「今昔物語」の作者は事實を寫すのに少しも手加減を加へてゐない。これは僕等人間の心理を寫すのにも同じことである。尤も「今昔物語」の中の人物は、あらゆる傳説の中の人物のやうに複雑な心理の持ち主ではない。彼等の心理は陰影に乏しい原色ばかり並べてゐる。しかし今日の僕等の心理にも如何に彼等の心理の中に響き合ふ色を持ってゐるであらう。（今昔物語に就いて）

と述べていることを考え合せれば、芥川が『今昔物語集』の説話を素材として、歴史小説を書いた姿勢及び方法がほゞ明らかであろう。確固とした主題が先行している場合、芥川は前掲Bの如き方法により、また古人と今人に共通する心理がモチーフである場合には「原色ばかり」の説話を近代的に彩色して、歴史小説を書いていったわけである。

『六の宮の姫君』は、明確な形では芥川独自の主題を含む作品とは考えられず、前掲Aで言及している「古人の心に、今人の心と共通する、云はばヒュマンな閃きを捉へた、手っ取り早い作品」の一つだったと考えられる。従って、この作品の自立性を問題にする場合、そのモチーフの考察が最も主要な課題であると考えられるのである。

以上の如く『六の宮の姫君』の基本的な性格を規定し、以下原話との相異点をとりあげ吟味する形で、この作品の自立性の検討にはいりたいと思う。

『六の宮の姫君』と原話との主な相異点は次の四点にまとめられる。

（1）第二節に『今昔物語本朝巻十六第十九話・東に下る者、人の家に宿りて産に値ふものがたり』を典拠とする挿話があり、それは宿命の怖しさを鮮明にする効果をあげているが、そこに「なりゆきに任せる外はない」との姫君の心情吐露が明白に書きこまれている。

（2）姫君が夫と別れている期間のことを描いた第三節にも「唯静かに老い朽ちたい。」「わたしはもう何も入らぬ。生きようとも死なうとも一つ事ぢゃ……」という姫君の心情描出がある。

（3）第五節、零落しきった姫君とその夫との再会、それに続く姫君の死を描いたこの作品のクライマックスの場面で、原話に比べて姫君の臨終の描写が著しく精しくなり、さらに、原話では姫君は夫を認めた瞬間に死ぬのに対して、芥川の作品では、姫君は中有に迷う姿に描かれている。

（4）原話は姫君の夫が出家することをもって結びとしているが、芥川は姫君の死後の夫については何も述べず、原話にない後日譚を付け加えている。姫君が「極樂も地獄も知らぬ、腑甲斐ない女」の魂として迷っていることを迷べ、姫君の臨終に立会った乞食法師（原話にはない）が、実は「やん事ない高徳の沙門」「内記の上人」だったという種明かしを結びとしている。

以上四点のうち、（1）（2）の二点に関しては、進藤純孝氏がその著『芥川龍之介』（昭39）において

芥川は、六の宮の姫君の心に、自身の心と共通するもの、「唯静かに老い朽ちたい」といふ気持をとらへ――中略――いや、姫君の上と同じやうに、芥川自身の上にも、「その安らかさ」が「思ひの外急に尽きる時が来た」のを、彼はこの作品に表現せずにはゐられなかったと言った方があたってゐるかも知れない。

と、姫君の心情描写に芥川自身の心情の表白があるとされるのに対して、長野氏は次のように反論されている。

なるほど「今昔」原典では、姫が「懶い安らかさの中に、はかない満足を見出し」て、「唯静かに老い朽ちたい」などとは書いてない。書いてはないが、そんな考えを姫　持っていたであろうことは、物語の叙述から十分推察しうる。―　中略――すれば彼女が「このまま静かに老い朽ちたい」というような考えをいだくのは、当然の帰結ではあるまいか。これを芥川の創見としてことごとしく主張することはできないはず。芥川は単に古典の空白な行間を埋めたにすぎないのだ。(4)

姫君の虚無的な心情が、文字では描かれてはいないが、原話の行間にこめられているとの長野氏の見解はそのまゝ肯定され得るものであろう。しかし、芥川がそれを明確に描出したことに、進藤氏の如く、芥川自身の内面の反映をみるのもまた決して無意味なことではないと思う。それは、前に引用した歴史小説についての芥川の考え方からしても、古人（姫君）と今人（芥川）に共通するヒューマンなものとして「虚無的な人生観」(5)があり、それ故に芥川が『今昔物語集』中の六の宮の姫君という人物に関心し得たのだと考えられるからである。確かにこの点は、原話と比較した場合、極だった相異点ではないかもしれないが、しかし『六の宮の姫君』の自立性を問題にする上では、そうした姫君の心情に対する芥川の心理的共鳴にこの作品のモチーフがうかゞわれる以上、やはり見おとしてはならない点であると考える。

が、何といっても、原話と比べた時著しい違いをみせている（3）、（4）についての考察が急がれねばならないだろう。と言うのは、（3）の吟味において、（1）、（2）にあげた姫君の心情描写が精細になっているとのことが、必然的に説明されると予想されるからである。

ところで（3）、（4）の二点をみるに、（4）は、原話にはまったくない「内記の上人」の条以外は、すなわち姫君の魂が迷っていることの叙述は（3）に含まれる問題である。従って（4）として検討しなければならないのは、「乞食法師」が実は

「内記の上人」だったとの種明しの部分だけになる。そして、この「乞食法師」＝「内記の上人」の関係が、姫君の悲劇にとって何らの連関をもっているとは考えられない。この点にふれた先学の見解を引用してみると、

「あれは極楽も地獄も知らぬ、腑甲斐ない女の魂でござる。御仏を念じておやりなされ。」と、乞食法師実は名高い内記の上人慶滋保胤にいわせているのは、冷たく突っぱなして描いたこのヒロイン（女主人公）に対するせめてもの憐憫の情であろう。(6)

短編小説の結末として、見た目には気の利いた幕切れだが、こんな驚きのために注意がさらわれて、せっかくの悲劇の効果が持ってゆかれる懸念がある。これがなくては芥川の創作がなくなって、たんに古典を現代文に焼き直したという印象がぬぐえない。内記の上人は作者の代弁者の役を担わせられているわけだが、その突如とした登場で解説の舌を振うのは、何といっても木に竹をついだ感じを脱し得ない。―中略――ともすれば感傷に流れ易いこの題材に理智的なしめくくりをつけようとしたらしいが――中略――私はむしろこの場面はない方がよいと思う。(7)

と、作者の心情からとするにしろ、理知からとするにしろ、「内記の上人」がこの作品に占める位置を積極的に認めようとはしておられない。確かに「内記の上人」は姫君の悲劇に何ら関与するものではないのであって、「理智的なしめくくり」としての方法論的な必然性しかもっていないと言い得よう。しかし、基本的な性格として仏教説話である原話から、この一条のあることによって近代の短篇小説としての形式的充足がなされている――内容的には「木に竹をついだ感じ」の失敗ではあっても――その意味で『六の宮の姫君』の自立性の一項として認めておきたいと思う。

最後に（3）の考察にはいるとしよう。原話では、夫と再会した感動の中に「堪へ難くやありけむ、即ち絶え入りて失せにけり」と姫君がその哀れな生涯を閉じ、夫が出家することを述べて結びとしている。この部分を芥川は、少し長きにすぎるが煩を厭わず引用してみると、次のように敷衍している。

男はこの聲を聞いた時、思はず姫君の名前を呼んだ。姫君はさすがに枕を起した。が、男を見るが早いか、何かかすかに叫んだきり、又筵の上に俯伏してしまった。尼は、――あの忠實な乳母は、其處へ飛びこんだ男と一しょに、慌てて姫君を抱き起した。しかし抱き起した顔を見ると、乳母は勿論男さへも、一層慌てずにはゐられなかった。

乳母はまるで氣の狂ったやうに、乞食法師のもとへ走り寄った。さうして、臨終の姫君の為に何なりとも經を讀んでくれと云った。法師は乳母の望み通り、姫君の枕もとへ座を占めた。が、經文を讀誦する代りに、姫君へかう言葉をかけた。

「往生は人手に出来るものではござらぬ。唯御自身怠らずに阿彌陀佛の御名をお唱へなされ。」

姫君は男に抱かれた儘、細ぼそと佛名を唱へ出した。と思ふと恐しさうに、ぢっと門の天井を見つめた。

「あれ、あそこに火の燃える車が。……」

「そのやうな物にお恐れなさるな。御佛さへ念ずればよろしうござる。」

法師はやや聲を勵ました。すると姫君は少時の後、又夢うつつのや

うに呟き出した。

「金色の蓮華が見えまする。天蓋のやうに大きい蓮華が。……」

法師は何か云はうとした。が、今度はそれよりもさきに、姫君が切れ切れに口を開いた。

「蓮華はもう見えませぬ。跡には唯暗い中に、風ばかり吹いて居りまする。」

「一心に佛名を御唱へなされ。なぜ一心にお唱へなさらぬ？」

法師は殆ど叱るやうに云った。が、姫君は絶え入りさうに、同じ事を繰り返すばかりだった。

「何も、――何も見えませぬ。暗い中に風ばかり、――冷たい風ばかり吹いて参りまする。」

男や乳母は涙を呑みながら、口の内に彌陀を念じ續けた。法師も勿論合掌した儘、姫君の念佛を扶けてゐた。さう云ふ聲の雨に交る中に、破れ筵を敷いた姫君は、だんだん死に顔に變って行った。

こゝに『今昔物語本朝五第四十七話・悪業を造る人、最後に念佛を唱へて往生するものがたり』を援用して描かれている姫君の死は、原話のそれと位相を異にしている。姫君の死を長野氏も指摘される如く、地獄（火の燃える車）と極楽（金色の蓮華）をかいま見させながら結局中有の闇に沈んでいく姿で描いていることには、単に「やや精しく」描かれていると言うだけでは不十分な、芥川のモチーフにかゝわりのある内容があると考えられるのである。こゝには、姫君の死についての芥川の解釈の表白があるのであって、原話とはなれた芥川の理念による姫君が描かれているのである。芥川は乞食法師をして「極樂も地獄も知らぬ、腑甲斐ない女」と姫君を言わしめているが、それは他でもなく、芥川自身の姫君の理解であったわけである。

六の宮の姫君の如きを憐むべしと致し候（大正十一年七月三十日付渡邊庫輔宛書簡）

その短編の中に意氣地のないお姫様を罵ってゐるの。まあ熱烈に意志しないものは罪人よりも卑しいと示ふらしいのね。（『文放古』大正十三年四月）[8]

などの言葉が、そうした芥川の姫君理解を裏づけているといえよう。芥川は、原話に、六の宮の姫君の死んでも死にきれぬ姿を見たのであろう。「熱烈に意志しない」「憐れな女」の生涯を、原話のように夫との再会という一つの感動の中に溶解してしまう形では見れなかったのだ。感動の中にも浄化しきらない残余未練の存在を姫君の中に見透していることが、姫君の臨終を中有の姿に敷衍した主因であったと思われる。そして、その点において芥川は六の宮の姫君と心理的共鳴を行い得たのであることを、他の作品を参照にしつゝ少し述べておきたい。

大正六年十月二十日から十一月四日まで、『大阪毎日新聞』紙上に連載した『戯作三昧』において、芥川は「馬琴」に託して、芸術にたずさわる者の三昧境を見事に描き出している。「馬琴」が――それは又芥川自身でもあったわけだが[9]――芸術営為の中で実感した「人生」とは「死」の対極であり、その中に永遠を内包する瞬間即永遠の感動であった。そのような感動を『奉教人の死』（大正七年九月『三田文学』）の中で、芥川は次のように描いている。

なべて人の世の尊さは、何ものにも換へ難い、刹那の感動に極るものぢゃ。暗夜の海にも譬へようず煩悩心の空に一波をあげて、未出ぬ月の光を、水沫の中に捕へてこそ、生きて甲斐ある命とも申さうず。

さらに、芥川の「自傳的エキス」といわれる遺稿『或阿保の一生』に

……目の前の架空線が一本、紫いろの火花を發してゐた。彼は妙に感動した ――中略――架空線は不相變鋭い火花を放ってゐた。彼は人生を見渡しても、何も特に欲しいものはなかった。が、この紫色の火花だけは、――凄まじい空中の火花だけは命と取り換へてもつかまへたかった。（八 火花）

と記しているのも、また同じ感動を「紫色の火花」と視覚化したものと考えられる。そして『奉教人の死』の後の『じゅりあの・吉助』（大正八年九月『新小説』）『尾生の信』（同九年一月『中央文學』）『往生繪巻』（同十年四月『國粋』）などの諸作品にも、そうした「刹那の感動」――「馬琴」の実感した「人生」――へにじりよりながら、その対極である「死」の中へ沈んでいく主人公達が描かれている。そして『尾生の信』において、主人公尾生の死を述べた後に

それから幾千年かを隔てた後、この魂は無数の流轉を閲して、又生を人間に託さなければならなくなった。それがかう云ふ私に宿ってゐる魂なのである。だから私は現代に生れはしたが、何一つ意味のある仕事が出来ない。畫も夜も漫然と夢みがちな生活を送りながら、唯、何か来るべき不可思議なものばかりを待ってゐる。丁度あの尾生が薄暮の橋のトに、永久に来ない戀人を何時までも待ち暮したやうに。

と付言していることからも少くとも理念の上では、「刹那の感動」に人生を凝縮してとらえる観点が芥川自身のものであったと考えられる。

ところが、大正十年三月から七月にかけての『大阪毎日新聞』海外視察員としての支那旅行以後、芥川はもはや「刹那の感動」とそれに殉ずる人物を描くことをしないのである。そして『藪の中』（大正十一年一月『新潮』）に最も典型的に描き出されている如く、死というものが、「刹那の感動」に密着するそれのように、瞬間的燃焼的なものと異なって、「中有」という概念に要約し得る時間的幅を有するものとして、反省的なものとして描かれることが多くなっている。

『藪の中』以降、『おぎん』（大正十一年九月『中央公論』）『二人小町』（同十二年三月『サンデー毎日』）『白』（同十二年八月『女性改造』）『一塊の土』（同十三年一月『新潮』）『死後』（同十四年九月『改造』）などに描かれているのは「中有」としての死、生との関係において相対的な死、反省的に省察されている死など、「刹那の感動」とはまったく結合し得ないものである。この期の芥川は、すでに「刹那の感動」としての「人生」に懐疑を憶え、そうした「刹那の感動」によっても燃焼しきらない残余にまで、その人生観を進めているわけである。そのような芥川の内的変化について詳細に検討する紙数はないが、大正十年後半から大正十一年にかけての時期が芥川の人生観上の一つの曲折点であったと考えられるのである。

以上の如く、『六の宮の姫君』執筆前後の芥川の一転遷をみた上で、再び『六の宮の姫君』に視線を戻してみる。

原話には、長い間別れていた夫と再会した「刹那の感動」に「堪へ難くやありけむ、即ち絶え入りて失せにけり」と、姫君の死が、まったく「刹那の感動」的に語られている。それにもかゝわらず、芥川が姫君の臨終の場面を「中有」の姿に敷衍し、「極樂も地獄も知らぬ、臍甲斐ない女」の死として精しく描いていることに、芥川の姫君への関心の仕方が如実に示されていると言えよう。姫君を「憐むべし」とし、「熱烈に意志しないものは罪人よりも卑しい」との理念からとらえていることに、芥川の姫君観があったのであり、その理念によってこそ、原話とは異なった姿に、『六の宮の姫君』の作品的世界が展開されたのだと考える。

従って、姫君の生涯を、夫との再会という「刹那の感動」によって浄化した哀れな一生とみるならば、それは原話にも十分描かれているのであって、それ故に、芥川の作品としての『六の宮の姫君』の自立性には疑問があり、最初に引用した、吉田氏や長野氏のこの作品に付する評価に止まるのもやむを得ない。

しかし、姫君の生き方を「臍甲斐ない」とし、「中有」に迷うが如き「罪人よりも卑しい」それとみ得るとすれば、そこには芥川によって、創造されたとは言えないまでも、新たに解釈された姫君像があるのであって、「死んだって死にきれぬ」[12]との心理的共鳴をモチーフとした、原話とは別の作品的世界をもつ『六の宮の姫君』がそれ独自の自立性をもっていると結論される。そして、この作品に露呈されている、心情的に共鳴するものから発想しながら　それを敢えて理知的に処理して作品化する芥川の創作態度の行詰りが、以後芥川が「保吉物」といわれる広義の私小説を書き始めるに至る主要な原因となっていると考えられ、さらには彼の自殺にも少なからぬ関係をもっていると考えられるが、この稿の論旨に直接の関係をもたないと考えられるので省略したい。

注

1　堀辰雄『芥川龍之介論―藝術家としての彼を論ず―』（昭・4）
室生犀星『芥川龍之介の人と作品』（昭・18）

2　芥川が参照した『今昔物語集』については、長野甞一氏の説（『古典と近代作家―芥川龍之介』（昭・42））に従って、大正四年博文館刊行の『校註国文叢書』とし、以下『今昔物語集』からの引用は同書によっている。

3　『芥川龍之介』（昭・17）―「新潮文庫」所収（昭・33）による。

4　前出『古典と近代作家―芥川龍之介』

5　塩田良平『芥川龍之介』（「学燈文庫」（昭・29））

6　5に同じ。

7　長野甞一氏（4に同じ）

8　一進歩的女性による芥川観という形で『六の宮の姫君』に言及した作品。

9　「僕の馬琴は唯僕の心もちを描かむ爲に馬琴を假りたもの」（大正十一年一月十九日付渡邊庫輔宛書簡）

10　森本修『芥川龍之介伝記論考』（昭・39）参照。

11　○「僕の神經衰弱の最も甚しかりしは大正十年の年末なり。……十一年の正月、ふと僕に會ひて「死相がある」と言ひし人ありしが、まことにそんな顔をしてをりしなるべし。」（『病中雑記二』）
○書斉の額を「我鬼窟」から「澄江堂」に変えた（森本修『芥川龍之

介伝記論考』）

○「芥川君は腹下しのあとで痛々しい程、痩せ衰え、そして非常に神経質に見えた。……芥川君は三年間程私が全く小説を書かなかった時代の事を切りに聞きたがった。そして自身そういう時機に来ているらしい口吻で、自分は小説など書ける人間ではないのだ、というような事を云っていた。」（志賀直哉『沓掛にて―芥川君のこと―』（昭・2））

12 『死後』（大正十四年九月『改造』）

▼受贈雑誌　昭和42年1月～6月（その一）

国語と国文学1～7月、国語国文2～5月、国文学解釈と鑑賞1～7月、国文学解釈と教材の研究1～7月、文学1～6月、解釈12～5月、国学院雑誌10～4月、学苑12～6月、文献ジャーナル12・5・6月、八雲4月、白路12～3・5・6月、日米フォーラム12～6月、肇国12～6月、成城文芸45・46、名古屋大学国語国文学19、学習院大学国語国文学会誌10、人文論究（関西学院大学人文学会）17巻1～3号、言語と文芸49～51、文学語学42～44、一橋論叢12～6月、近代文学研究（東洋大学近代文学研究会）13、文学会論集（甲南大学）32、甲南国文14、山口大学文学会誌17巻2、国語国文学（東京学芸大学）1、女子大文学（大阪女子大学）18、女子大国文（京都女子大学）43～45、演劇学（早稲田大学演劇学会）7、文化（東北大学文学部）30巻3・4号、朝鮮学術通報3巻5～4巻2、中世文芸（広島大学中世文芸研究会）34・37、国文鶴見（鶴見女子大学日本文学会）1・2、金沢大学教養部論集3、演劇研究（早稲田大学演劇博物館）2、国語国文論集（静岡女子短期大学）1、国立国語研究所年報16、成蹊大学文学部紀要1・2、国語学研究（東北大学文学部）6、王朝文学（東洋大学王朝文学研究会）13、日本文学誌要（法政大学）12～17、実践文学29・30、日本学術会議月報12～2月、文芸と思想（福岡女子大学文学部）29・30、愛文（愛媛大学文理学部）5、相模女子大学紀要25～27、国語研究（国学院大学）23方言学会会報16～19、国文（お茶の水女子大学）26、人文科学紀要（東京大学教養学部）39、国語研究室（東京大学国語研究室）5、愛媛国文研究16、学大国文（大阪学芸大学）10、語文（日本大学国文学会）25・26、専修国文1、金沢大学教育学部紀要15、言語文化（一橋大学語学研究室）3、大阪経大論集52～55、文林（松蔭女子学院大学国文学研究室）1、近世文芸橋（広島近世文芸研究会）11、人文研究17巻10～18巻3、萬葉62・63、国文学研究（梅光女学院短期大学）2、清泉女子大学紀要14、人文論集（静岡大学人文学部）17、愛知県立大学文学部論集17、文科報告（鹿児島大学教養部）2、龍谷大学論集379～382、国語国文研究（北海道大学国文学会）34・35、軍記と語り物4、国語学（国語学会）67・68、東洋学術研究（東洋哲学研究所）5巻12・6巻3、人文研究（神奈川大学人文学会）35、玉藻（フェリス女学院大学）2短大論叢（関東学院短期大学）30、鶴見女子大学紀要4、薩摩路（鹿児島大学国文研究室）11、同志社国文学2、日本文学（東京女子大学）28、中京大文学部紀要1、（五三頁につづく）